

## 談話資料を利用した方言研究

井上文子（国立国語研究所）

### 1. 談話資料の特徴

談話資料とは、一般に、日常的な会話などの音声を録音し、それを忠実に文字化し、共通語訳や注記をつけたものをいう。

談話資料は、内省や面接調査では把握するのが困難である言語形式や言語運用について、実際の発話における状況を確認できる点が有効である。話者本人も無意識のうちに用いていることばや、話者自身には意味の説明の難しい語や文法形式についても、会話から文脈や場面が読み取れることによって、観察者にとっては分析が可能になるという利点もある。また、談話には、発音、アクセント、イントネーション、語彙や文法形式、文表現など、いろいろな要素が含まれるため、1地点の記述・分析をおこなうのにも、多地点を比較するのにも、多面的な利用が可能なデータである。

ただし、談話資料については、次のような留意点もある。談話資料は、ありのままの方言を記録したものであっても、方言の一部分を切り取ったものに過ぎず、記録されている範囲のことしかわからない。調査表調査では求める項目を効率的にたずねることができるのに対して、談話資料では求める項目が得られるとは限らない。また、談話の録音にあたっては、さまざまな場面にわたっての収録が難しいため、分析対象とする場面が限定される。特に、「自然」談話の収録は想像以上に困難である。さらに、記述・分析のためには多量の資料が必要であり、比較のためには同じ条件で収録された複数の地点の十分な量の資料が必要となる。

このような制約があるにしても、現実の言語活動が得られるという利点は大きく、また、対象とする要素も多岐にわたるため、方言の実態を解明するうえで、談話資料は欠かすことのできないデータであるといえよう。

### 2. 代表的な方言談話資料

日本方言研究会の方言研究支援プロジェクトのページにある「全国を対象とした方言資料一覧」と重なるものもあるが、音声を付属している、大規模な方言談話資料を紹介する。

#### ■日本放送協会編（1999）『CD-ROM版 全国方言資料』全12巻（小冊子1冊、CD-ROM12枚） 日本放送出版協会

NHKが、1952～1968年に採録した約30時間分の方言会話の録音・文字化資料で、全国規模で収録・刊行された最初のものである。北海道から沖縄に至る141地区において、原則として60歳以上の老年層男女各1名による対話を録音、文字化し、共通語訳、脚注、方言の解説をつけた。文字化は、表音的カタカナ表記、琉球方言はローマ字などによる音韻表記。各地点とも10分程度の「自由会話」と、各場面30～40秒程度の「あいさつ」からなる。「あいさつ」は、「朝」「夕」「道で」「買物」「送り」「迎え」

「不祝儀」「祝儀」という各地点共通の 8 場面の演技的対話。刊行時期の違いにより、冊子版、ソノシート版、カセットテープ版、CD-ROM 版がある。CD-ROM 版は、カセットテープ版の冊子の全ページを PDF 形式の画像データにし、音声ファイルをリンクしている。「序・索引編」CD-ROM では、地図索引・地名索引・自由会話索引で収録巻を調べることができる。

■ 国立国語研究所はなしことば研究室編(第 1 巻のみ地方言語研究室編)(1965～1973)

『方言録音資料シリーズ』全 15 巻(冊子 15 冊) 非売品

[https://www.ninjal.ac.jp/publication/catalogue/hogenrokuon\\_siryu/](https://www.ninjal.ac.jp/publication/catalogue/hogenrokuon_siryu/) (概要)

[https://mmsrv.ninjal.ac.jp/hogenrokuon\\_siryu/](https://mmsrv.ninjal.ac.jp/hogenrokuon_siryu/) (データ)

国立国語研究所が 1963～1971 年に採録した 14 地点(鹿児島市・宮崎県都城市・鹿児島県川辺郡笠沙町片浦・岐阜県不破郡垂井町岩手・高知市朝倉米田・秋田県男鹿市脇本大倉・鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦・高知県幡多郡大方町・石川県羽咋郡志雄町荻市・愛知県小牧市藤島・京都市・沖縄県瀬底島・静岡市旧大井川村・沖縄県鳩間島)における方言会話や昔話の文字化資料である。冊子には、方言音声を文字起こししたもの、その標準語訳、注、収録地点の概観、収録した方言の特色などを所収する。文字化には、ローマ字による音声表記または音韻表記を用いる。話者は、老年層を中心に、地点によっては中年層・若年層が含まれる。冊子の本文 PDF、テキストファイル(1～5 巻・8 巻・11 巻)、音声ファイルは、上記 web ページからダウンロードすることができる。地点によって異なるが、音声は約 20～130 分程度である。

■ 国立国語研究所(1978～1987)『国立国語研究所資料集 10 方言談話資料』全 10 巻

(冊子 10 冊、カセットテープ 29 本) 秀英出版

[https://www.ninjal.ac.jp/publication/catalogue/hogendanwa\\_siryu/](https://www.ninjal.ac.jp/publication/catalogue/hogendanwa_siryu/) (概要)

[https://mmsrv.ninjal.ac.jp/hogendanwa\\_siryu/](https://mmsrv.ninjal.ac.jp/hogendanwa_siryu/) (データ)

国立国語研究所が 1975～1981 年に採録した 20 地点(青森・岩手・山形・宮城・群馬・千葉・長野・静岡・愛知・新潟・福井・京都・奈良・島根・鳥取・愛媛・高知・長崎・宮崎・沖縄)における約 25 時間分の方言会話の録音・文字化資料である。冊子には、方言音声を文字起こししたもの、その共通語訳、注、収録地点の概観、収録した方言の特色などを所収する。文字化は、音韻表記(音素表記)と音声表記とを組み合わせた、カタカナによる簡略音声表記である。沖縄については、国際音声記号による音声表記を用いる。方言会話は、対等の関係にある「老年層の男性と老年層女性の対話」または「男女を含む老年層話者 3 人の会話」は、1 地点 50 分程度の談話が 20 地点。「老年層の男性と若年層男性との対話」または「両者を含む 3 人の話者の会話」は、1 地点 20 分程度の談話が 16 地点。「品物を借りる」「旅行に誘う」「けんかをする」「新築の祝いを述べる」「隣家の主人の所在をたずねる」「道で知人に会う」「道で目上の知人に会う」「うわさ話をする」という、各地点共通の 8 場面の「場面設定の会話」は、1 地点 1 場面につき 30 秒～2 分程度の演技的対話が 15 地点。この 15 地点については、対等の関係の老年層男女の会話、老年層男性と若年層男性の会話、場面設定の会話がすべてそろっている。ただし、沖縄は、場面設定の状況が他の地点と異なっている。話者

は、老年層 60 歳以上、若年層 20～30 歳台の、在外歴の短い人を原則とする。冊子の本文 PDF、テキストファイル（沖縄以外）、音声ファイルは、上記 web ページからダウンロードすることができる。

■国立国語研究所編（2001～2008）『国立国語研究所資料集 13 全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』全 20 巻（冊子 20 冊、CD-ROM20 枚、CD20 枚）  
国書刊行会

[https://mmsrv.ninjal.ac.jp/hogendanwa\\_db/](https://mmsrv.ninjal.ac.jp/hogendanwa_db/) （サンプルデータ）

1977～1985 年度に文化庁が実施した方言談話の収録事業「各地方言収集緊急調査」報告が原資料である。報告資料の中から各都道府県につき 1 地点（沖縄県は 2 地点）、計 48 地点を選び、はえぬきの高年層（原則として収録時 60 歳以上）男女の自由会話の音声・文字化・共通語訳を電子化している。冊子には、表音的カタカナ表記による方言会話の文字化、共通語訳、注記、収録地点の概観、収録地点の方言の特色についての解説などを所収する。CD には、1 地点につき 5～46 分、平均 30 分、合計約 24 時間の文字化部分全体の方言会話音声を収録する。CD-ROM は、冊子のページを PDF 形式にしたものに方言音声をリンクしている。冊子とほぼ同じ情報のほか、方言音声の文字化の text ファイル、文字化に対応する共通語訳の text ファイルも収めている。

なお、椎名渉子・小林隆（2017）には、『全国方言資料』『方言録音資料シリーズ』『方言談話資料』『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』の 4 資料に所収されている自由会話を、話題ごとに分類し、収録地点、収録年を記載して整理したものが「方言談話資料（自由会話）の話題一覧」として掲載されている。また、『全国方言資料』『方言録音資料シリーズ』『方言談話資料』の 3 資料に所収されている場面設定会話を、収録場面ごとに分類し、収録地点を記載して整理したものが「方言談話資料（場面設定会話）の話題一覧」として掲載されている。これらの詳細で具体的なリストは、方言談話資料を探すうえで非常に有益である。

■国立国語研究所（2020～）「日本語諸方言コーパス（Corpus of Japanese Dialects : COJADS）」

<https://www2.ninjal.ac.jp/cojads/index.html> （概要、利用申請、CSV データ）

日本各地の方言の談話音声を大量に集めた、日本で初めての方言コーパスである。1977～1985 年度に文化庁が実施した方言談話の収録事業「各地方言収集緊急調査」報告を原資料としている。2019 年 5 月公開のモニター版は、『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』のデータをコーパス化したもので、全国 48 地点（各都道府県 1 地点、沖縄県 2 地点）、約 24 時間分の自由会話を採録している。モニター版は、方言テキストの「文字列検索」、標準語テキストの「短単位検索」「文字列検索」が利用可能である。オンライン検索ツール「中納言」を通しての利用となるため、「中納言」の登録申請が必要である。

（<https://www2.ninjal.ac.jp/cojads/index.html?targ=howto>）

web ページからダウンロードが可能な CSV 形式のデータは、形態素分析前のプレーン

テキストであるが、各種タグや注釈などの情報を確認することができる。2020年3月には、12府県14地点（宮城・福島・茨城・群馬・神奈川・岐阜・愛知・大阪・兵庫・福岡・熊本・大分）の未公開データ約11時間分（自由会話・場面設定）を追加した。

### ■東北大学方言研究センター（2012～）「東日本大震災と方言ネット」

<https://www.sinsaihougen.jp/>

東北大学方言研究センターは、東日本大震災を受け、方言会話の組織的で継続的な収録・蓄積について、積極的な取り組みをおこなってきた。東北大学方言研究センター編（2013、2014、2015、2016、2017、2019）といった被災地の方言会話集を作成し、web上でも文字化・音声・一部の映像を閲覧・聴取・ダウンロードすることができる。特に、場面設定会話では、日常生活の場面を切り取り、小道具を用いて会話をリアルに再現するなど、目的別言語行動の種類の豊富さ、ロールプレイのやり取りの自然さ、会話の自然な終了までの一連のやり取りなど、言語生活や言語行動を網羅的にとらえようとしている点が注目される。椎名渉子・小林隆（2017）には、実際に話者に提示した場面の指定が『『生活を伝える被災地方言会話集 1～3』の設定場面リスト』としてまとめられている。

### 3. 談話データを用いた研究事例

談話データは、文アクセント、語彙、あいづちやフィラーの出現状況、文法形式の地域差、敬語の形式や運用、談話の構造や展開、言語行動など、さまざまな研究に用いられている。具体的な研究事例を簡単に紹介する。

#### ●文法形式

木部暢子（2020）は、「日本語諸方言コーパス」モニター版により全国の推量形式を検索し、その特徴を概観した。全国には、本来名詞述語に使われていたコピュラ由来の「ダベ」「ダロ」「ジャロ」「ヤロ」などの形式を動詞述語や形容詞述語にも拡張させて、推量形式を画一化させる方言とそうでない方言とがある。前者の典型は関西方言である。後者には、「べ」を使う地域（北海道・東北・北関東）、「ズラ」「ラ」「ツラ」「ズ」を使う地域（中部地方）、述語のタイプごとに「ジャロ」「ウ」「タロ」「マイ」「カロ」を使う地域（四国・九州）、「ロ」「ツロ」を使う地域（高知）がある。四国・九州方言の「ジャロ」「ウ」「タロ」「カロ」は、古典語の「む」を継承したものである。「ウ」は機能の点でも古典語の「む」を引き継ぎ、主語の人称と動詞の意志性により意志と推量の両方の意味を表す。高知市方言の過去推量は、データ収録当時、「ツロ」から「タロ」への変化が進行中であったことがモニター版から確認できる。

#### ●談話展開

久木田恵（1990）は、実地調査で得た自然談話の録音を対象として、東京方言の談話展開の方法を解明し、関西方言との比較によって、展開方法の地域性を考察して、類型化を試みている。東京方言の談話展開については、①客観的状況説明と主観的説明ないし判断を文末の「ネー」「ノ」で繰り返し述べていく方法と、②「ダカラ」「ホラ」

「ネッ」をキーワードとして聞き手を強引に納得させていく方法の、おもにふたつの展開パターンがあり、前者は女性に多い型であるが、後者は老若男女を問わず認められる。いずれも聞き手に反論の余地を与えず、強引に話者の主張を押し付け、聞き手を納得させていくものである。関西方言の談話展開については、客観的状況説明が多く、順接の接続詞によって説明を累加する形で、聞き手に続きを期待させながら展開している。文末の卓立で念押しすることはあるが、説明の確認程度のもので、場合によっては自分で引き取って自己確認することもある。東京方言の談話展開の方法が、話し手が自己の主張をあらわにして、聞き手を納得させる方向に展開していく「主観直情型」であるのに対して、関西方言の談話展開の方法は、ひたすら状況を詳しく説明し、聞かせる展開である「客観説明累加型」とまとめられている。

キーワード(談話標識)の視点を精密化させ、発展させたものとして、琴鍾愛(2005)がある。多量の談話データを計量的に扱い、東京方言・大阪方言・仙台方言の説明的場面で使用される談話標識の出現傾向を比較することで、三方言の談話展開の方法の地域差を明らかにした。東京方言では、「発話権取得・維持」(ダカラ)・「情報共有喚起」(ホラ)・「情報共有確認」(デショー)がよく使われ、大阪方言では、「説明開始・累加」(ホンデなど)・「自己確認」(ウンなど)が顕著で、仙台方言は、「情報共有表示」(ヤハリ)・「情報共有喚起」(ホラ)・「情報共有確認」(デショー(↑))・「念押し」(ネ(↑))が多く認められる。談話標識の出現頻度と組み合わせパターンから、仙台方言は、自分が発言権を持つことをアピールし、情報共有を積極的に働きかけていく「他者説得型」、大阪方言は、話の進行を単純にマークしつつ、自分で納得することに主眼を置く「自己納得型」、東京方言は、両者の中間に位置し、仙台方言に近い面を持つタイプであるとまとめている。

## ●言語行動

沖裕子(2006)は、『方言談話資料』の「場面設定の対話」を資料として、特定の表現の談話における機能について分析し、感謝表現に見られる場面と言語選択の問題を、「言語に表現されない部分をも含めての言語行動」という観点で提示した。

感謝表現としては「ありがとう」が典型的だが、日本語においては「謝罪」と「感謝」とが連続的で、「すみません」に代表されるように「謝罪」の意を持つ表現が、場面によっては「感謝」表現として機能する。この用法を「謝罪的感謝表現」と呼び、各方言に謝罪感謝表現がどのように出現するかを整理している。隣人に梯子・鋸といった道具を借りに出向く「品物を借りる」談話では、「オーキニ」(奈良)・「ダンダン」(島根)などの感謝表現や、「メヤグダバデ(迷惑だけれど)」(青森)・「モーシャケネアードモ(申しわけないけれども)」(新潟)などの謝罪的感謝表現が使われる地点もあるが、何も言わない(群馬)・「カッテイクゾ(借りていくぞ)」(愛媛)・「タノムオー(頼むよ)」(千葉)など、感謝表現も謝罪的感謝表現も現れない地点も半数以上を占めることが紹介されている。

一方、特に親しいわけではない人に「新築の祝いを述べる」談話では、祝いの品を贈られたことに対して「ありがとう」「ごちそうさま」「もったいない」などの感謝表現、「すみません」「申し訳ない」「お気の毒な」などの謝罪的感謝表現、また、両方の表現

が全地点で見られた。各場面の特性を比較し、親疎の関係と場面適切性に触れ、「感謝」の気持ちを表現するのに直接的な言語表現を用いない言語慣習が成立している社会・場面があることを指摘している。

#### 4. 参考文献・関連文献

- 荒則子 (2003) 「方言談話における計量国語学的類型論—四国・九州・沖縄地方—」『玉藻』39 フェリス女学院大学国文学会
- 井上文子 (2018) 「ロールプレイ会話による参加型方言データベース構築の試み」小林隆編『コミュニケーションの方言学』ひつじ書房
- 井上文子編 (2014) 『国立国語研究所共同研究報告 13-04 方言談話の地域差と世代差に関する研究 成果報告書』国立国語研究所
- 井上文子・松田美香・酒井雅史・白坂千里 (2015) 「第34回研究大会ワークショップ ロールプレイ会話による方言談話対照研究の試み—地域差・世代差・性差・メディア差に注目して—」社会言語科学会学会誌編集委員会編『社会言語科学』17-2 社会言語科学会
- 沖裕子 (2006) 『日本語談話論』和泉書院
- 木部暢子 (2020) 「諸方言コーパスに見るモダリティ形式のバリエーション—推量表現の地域差—」田窪行則・野田尚史編『データに基づく日本語のモダリティ研究』くろしお出版
- 久木田恵 (1990) 「東京方言の談話展開の方法」『国語学』162 国語学会
- 琴鍾愛 (2005) 「日本語方言における談話標識の出現傾向—東京方言、大阪方言、仙台方言の比較—」『日本語の研究』1-2 日本語学会
- 椎名涉子・小林隆 (2017) 「談話の方言学」小林隆・川崎めぐみ・澤村美幸・椎名涉子・中西太郎『方言学の未来をひらく—オノマトペ・感動詞・談話・言語行動』ひつじ書房
- 東北大学方言研究センター編 (2013) 『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集 宮城県沿岸 15 市町』東北大学大学院文学研究科国語学研究室
- 東北大学方言研究センター編 (2014~2017) 『生活を伝える被災地方言会話集 宮城県気仙沼市・名取市の 100 場面会話』1~4 東北大学大学院文学研究科国語学研究室
- 東北大学方言研究センター編 (2019) 『生活を伝える方言会話 [資料編・分析編] 宮城県気仙沼市・名取市方言』ひつじ書房
- 中西太郎 (2017) 「言語行動の方言学」小林隆・川崎めぐみ・澤村美幸・椎名涉子・中西太郎『方言学の未来をひらく—オノマトペ・感動詞・談話・言語行動』ひつじ書房
- 日高水穂 (2007) 『授与動詞の対照方言学的研究』ひつじ書房
- 日高水穂 (2012) 「「察し合い」の談話展開に見られる日本語の配慮言語行動」三宅和子・野田尚史・生越直樹編『「配慮」はどのように示されるか』ひつじ書房
- 日高水穂 (2014) 「談話の構成から見た現代語の配慮表現」野田尚史・高山善行・小林隆編『日本語の配慮表現の多様性—歴史的変化と地理的・社会的変異—』くろしお出版

版

松田美香（2015）「大分と首都圏の依頼談話比較—大分方言の「アンタ」「オマエ」のフ  
ィラー的使用—」『別府大学紀要』56 別府大学

三井はるみ・井上文子（2007）「方言データベースの作成と利用」『シリーズ方言学 4  
方言学の技法』岩波書店

（原稿提出日 2020 年 8 月 30 日）